

第3章 対談・教養教育へのアプローチ

鷺田小彌太／橋爪大三郎

▼教養教育はつまらなく、しんどい(?)

鷺田 私は教養部に属しています。教養学部ではなく、いろんな大学で知る限り、教養の教師は待遇もわるい。それから自分の専攻した学問と違うことをやらざるをえない。だから授業自体はおもしろくない。教養部は、その意味で言うと、即時的というか、自分の感情としては、役に立たない部門だ、と言っている。

ところがもうすこし自分の長い経験というか、一九六〇年以降に（私は橋爪さんよりすこし早いと思うんですが）大学に入って、ずっとやってきた経過のなかで見ると、まともに教養教育というのを受けたことがないことに気づくのです。教養教育は何であるかという議論をしたこともない。

読書

「憲法30」の特集は「極論・憲法なんて、いいない」。憲法はどもあるべきかを論ずる前に、憲法が存在すべきかどうかを考へるもの順序というもので、この特集の狙いはなかなか正しいと思ふ。だがこのラジカルな議論には、ちょっとムスカシイところがある。

創刊号から西部邁論を連載している小浜逸郎は、我々の生活感覚との距離を緻密に測定しながら西部の憲法論を批判し、自らの改憲論の根拠と輪郭を描いている。橋爪大三郎は、権力を統御するために憲法は必要だ、憲法を自ら作り出すことが近代人の条件だ、憲法が国家解体の理念を肯定していいじゃないか、といったものながら明晰に説いている。二人の議論は、筆者には若干高級すぎるが、教えられると多く、なによりこれにはこのテーマについて発言する充分な理由があるのだ。

「憲法30」は憲法の本質的に押しつけておられる（橋爪大三郎）と述べる宮田論や、自らは近代合理主義者であるが、日本人一般はなぜとも法国家な望んでおらず、憲法

斜断機

「憲法」論議のムスカシサ

などあっても守るつもりはないのだから、憲法論争自体ナンセンスだ、という池田清彦のラジカルな議論はどうか。じつは筆者自身、冷戦終結後はみんなで主体的に国の将来を考へましよう、というポスト左翼的倫理性は嫌いだし、憲法についての感じ方はこの二人に近い。しかし単純な疑問なのだが、ここには発言の「理由」がないのではないだろうか。憲法を論ずる「と」自体がナンセンスなら、なぜこんな発言なぞせず、争ひにでも行かないのか。

もちろんこれらの議論こそがこの特集を鋭角的にしているのだし、発言するな、などと言いたいのではない。憲法など関係ないはずの私が、なぜぐちゃぐちゃ言わずにいられないのか、何が不快で不都合なのか、それをもっと踏み込んで述べてくれ、と言いたいのだ。それこそが、憲法の正体を我々の側から明かすことになるはずだから。

魚釣りしていたら、魚は憲法どおりに釣れ、なぜかおまへが来た。だから、はかやうう、俺には憲法なんか関係ねえ、と言いつつ、問題はいきりするだけとねえ。

(柵)

じゃあ一度、教養教育というのをやってみよう、と取り掛かった瞬間、それはいったい何なのか、ということ自体がぜんぜんわかっていないわけです。教養教育の中心になる内容とか方法とかということが。

そういうところから考えていくと、いま大学でやっている教養教育というのは、ぜんぜんでたれめと言っては変だが、まったく私たちが考えさせられているとか、考えているとかという以前のものにしかすぎない。ところが、今度、「東北・北海道一般教育研究会」で発表したんです。「大学の自由化」というのを。

そうすると、国立大学で一般教育を受け持っている人たちが、もう一般教育研究会自身もやめよう、そんなものはもういらないんだ、という雰囲気なのです。つまり、学部に属して専門をやる、それでいいんだ、と。しかも、学生もそのほうが喜ぶしということなんです。

あまり露骨なんで、私のほうはムツとしちゃった。そういうことなら、自分の大学で教養教育をこそやってみよう、という気持ちにさせられるほどにでした。もつとも、教養で頑張りたいというのは、一つに専門がだらしないということがあるんです。いまの大衆大学の経済とか法学部系の専門は、私たちから言わせたら、非常につまんないことをやっているわけです。つまらないと、学生ばかりか教師も感じている。だから、学生をいじめることぐらいしかなくなるわけです。こっちが本気になって、カリキュラムをいじくって教養らしきことを教え始めたら、学生がどっときたんです。

こっちは方法も内容も決めないで、自分なりの経験でやろうと思ったときに学生がきたわけです。いったいこれは何なのか。欧米で言っている、リベラルアーツの概念を変えて、もうすこし大衆大学に合ったカリキュラムの編成変えをする必要がある、と前から思っていたが、それは単なる私の主観的なものではなくて、客観的な根拠があるのではないか、と思い知らされたわけです。

じゃあ、いまある教養部なんか解体してもいい、教養課程なんかなくなってもいい、しかし教養を教えよう、教養を専門的に教えよう、教養は何であるか、ということもやりながら、ということ改革の柱に立ててみたのです。専門に行きたい人は行ったらいい、しかし、私たちは、教養を、コースとしては残さなくてもいいが、それをやるためのオープンカレッジというか、オープンコースみたいなものをつくって、教養科目を取ったら大学を卒業できるというようなシステムをいま模索しているんです（このシステムを維持するためには、最低限度の人事権は必要ですが）。こういう自分自身の教える過程のなかで出てきた問題が、ものすごく教養教育のなかにあるのです。私は、あまりカルチャーとか言われているものは好きじゃないから、教えない。それでもたまたに実験的に教えたり、あるいは議論したりした場合、いまのカルチャーセンター隆盛のなかで、カルチャーセンターはつまらない、という声をしばしば聞きます。実際、きちっとした内容のものを知りたい、というのです。一般的な生涯教育とかいうのではなく、という具合にです。大学外の人も、教養っていったい何なのか、ということを通して新しい議題の枠組みのなかでつかまえる必

要があるのでは、と感じているのです。

私は哲学をやっていますが、教養と学問との接点というのは非常に曖昧なんです。ヘーゲルなんかでも教養を定義しようと思って困っているわけですね。そういうところを自分で書いたりしていくと、案外本は売れているんです。橋爪さんも「教養と学問の接点」みたいなところを書かれている。別に、そんなことを断らないで書いているんですが。でも、教養教育をやるというのは、しんどいのです。なんの業績にもなりませんしね。

▼理工系大学の例——東工大

橋爪 これ「驚田のレポート」『大学の自由化』と「教養の時代」。ともに前掲『大学〈自由化〉の時代へ』収録、いくつか読ませていただきましたが、意見の違うところなんかすこしもないんです。だから、何を話せばいいのかというのがまず問題だ。教養って何だろうって、真面目に考えたりしたことなんか、私はありませんからねえ。

組織上のことで言いますと、私のいる東京工業大学というのは理工系の大学で、文系の学科なんかほとんどないわけです。ここが、驚田さんの大学とぜんぜん違う。でもやはり、一般教養の単位を習得させなくてははいけませんよね。そこで、いつごろだれが考えたのかわかりませんが、教養の期間をなくしてしまって、クサビ型と称していますが、一、二、三年、まあ四年もかかってもいいから、そのあいだに一般教育の単位を履修しなさい、と。入学した段階で、類と言いま

すが、だいたいの専攻も決まっているんです。そのうえ、二年生から学科に所属してしまって、ほぼ彼らの意識としては理系のある特定の専攻の学問を学ぶために大学にきている。と、どうなるかという、まず七割か、八割の学生さんたちは卒業に必要な単位をそろえるために、できるだけ少ない期間で、効率よく人文系の単位を取得したい。もしそのうえに、講義がおもしろければなおいい。こういう考え方なのです。

で、残りの二割ないし一割ですが、その人たちは、この大学はすこし理系に偏っている、このままだと卒業してから先が思いやられる、人間関係の面でも社会常識の面でも、それから女性が少ないとかいろいろありますが、人間が非常に偏っていくんじゃないかと心配しているわけですね。それで積極的に人文的なものに関心を持ったり、情報を求めたり、教師に接触したりする。

総合大学なら、サークルに所属すれば、理系・文系半々だったりますでしょう。それでかなり補われる。また、他学部聴講などの方法もありますから、それでも補える。大学の雰囲気もだいぶ違って、有形無形の空気が漂っているが、東工大では事情がちよっと違うんですね。

さて、人文社会系の一般教育をどれぐらいのスタッフでやっているかというと、全部で二十人ちょっと。いま一学年千三百人ぐらいですが、四年生まで五千人近くの学生に対して人文系が十人、社会科学系が十人なんです。そうすると政治、経済、法学、社会学……と並べていくと、だいたい一科目一人か二人なんです。それで、たとえば私ですと、国内だけでも三千人からいる社会学会の動向や国外の事情を、学生に知らしめる情報源であることを求められているんですね。

教養学部でもないし、教養部でもない。それで「一般教育等」(等というのは教職のことだと思っんです)という形で、体操の先生とか教職の先生とか語学の先生とか人文社会の先生とかが(理科系の一般教育の人たちは別なんです)ごしゃごしゃと一カ所にいるわけです。それがさらに分かれていて、人文社会の人たちが二十人ぐらいいるんです。正式に認知された組織ではないのかもしれないが、「何とか群」と称していて、そこが予算配当なんかをとってくる。待遇なんかのことで言いますと、いろんな形でいろんなお金がきたのを大学全体でプールして、それをもう一度分配するらしいのですが、過去のいろんな経緯から私どものところはまああの待遇なんです。それで負担は、特別のことがなければ(つまり大学院などを担当しなければ)週三コマぐらいなので、時間はわりあいあるんです。そこで大学の先生をやりながら、なんか他にもいろいろやりたいというような、そういうタイプの人がわりあい集まってきやすいという、そういうセクションですね。ただ、これでいいのかという話が起きている。過去は十分うまくいったような気もするんですが、先のことを考えて、大学院大学につくりかえようという話が東工大では起こっているんです。大学院大学につくりかわっちゃうと、大学の先生は、全員大学院に所属することになりますから、一般教育の先生なんていうのは消滅してしまうわけですね。それでどうするかというので、去年からこのかた、会議会議また会議というようなことになっています。

結論から言うと、理工系と人文社会科学系の接点になるような大学院の専攻を一つつくるべきだということになりました。将来そういう分野は大発展しますから、その核になるようなものを

つくっておいて、将来それが一つの分野として確定していったら、ここに枝葉を伸ばしていけるような、そういう種みたいなのを大学につくってみる。で、人間社会重視という方針を東工大も掲げているのですが、そういうふうな追い風をうけて、何ができるかいまちょっと考えている、そんなところです。

実際問題としては、いろんな制約のなかで何ができるかを考えなければなりません。まったく白紙の状態で考えるならば、「驚田がレポートしたような」大学の自由化ができればいちばんだとかから思っていました。どこを見ても、驚田さんのプランはほほうなずけることばかりです。いっぽう現実的なプランとしては、非常に控え目におっしゃっているわけですが、それにはやはりいくつかオプションがあるだろう。

▼平均値を上げる教育の重要性

驚田 理工系の場合にはむしろ教養課程というのは組織としてないし、それから人事権も非常に弱いんですね。だからむしろなくなってもいい、もともとないというか、すごく楽なわけです。私たちは文科系ばかりの学校で、しかも教養が必要なのかどうかということ自身が問題なわけですね。

もうすこし言うと、教養教育を真面目にやるとシンドイですわ。カリキュラムは複雑になり、コマ数は増え、学生数も増えるんですね。これはどこでもそうですが、いい教育サービスをやれ

ばやるほど負担が増える、学生数が増える。さばればさばるほど、楽でどんどん手抜きできる。これは別に大学だけのことではないと思いますが。そのなかで、東工大などは違うと思います。が、私たちの場合、だいたい偏差値五〇ぐらいの、教えればかなりいいレベルまで（レベルというのは学力だけではなくて）いく子がいるんです。そういう子は拾っていききたいというのが教育の目標にある。教育の主要な対象をどこにすえるかというと、私はいつも、平均レベルの子をすこし上げていくというところにおきます。それも専門で上げるだけではなくて、トータルで上げていく。

そういうことで、哲学プロパーのことを教えるのではなくて、哲学的な思考とかタイプとか意思決定とか、そういうものをすこし系統的に教えたい。それもしつこく教えるのではなくてね。

講義というのは昔の形式そのままです。私たちのときは（橋爪さんはどうかわかりませんが）だいたいの先生がノートを読んだんですね。これからは書け、と言って、まず鉛筆とって（大学に入ってびっくりしましたが）書かせるんですね。それを説明するわけです。外国のを翻訳したり、あるいはまとめたものを、書かせて、解説する。それが基本的な講義形式だったのです。

いまは違います。それに、学生はあまり鉛筆、ノートを持てきませんからね。だから二十回とか三十回、一年間に講義するなんていうのは、とてもじゃない——落語家だって、すごい人も百の古典落語やるというわけではないですからね。講義が五つぐらいあって、それで全部カテゴリーが違う。だから私は十コマぐらいで一講義にして、アメリカの半期制と同じように、一つ

のクラスが終わるような、そういう形に講義形式も変えていって、学生に非常にわかるようなプログラムをつくっていききたいと思っている。あまり高校みたいになっては困るけど。

教養教育の重要性を、二、三の理科系のところで話してきたら、時代錯誤だ、と言われましたね。そういうふうなのは古いんだ、と。たぶん一高とか、ナンバースクールの高等学校の教育が、教養教育の典型だったと思うんですね。たしかに、あれはエリートたちがやる教育でした。いまは、普通の人が、教養教育をやるわけです。だから方法も全部違うと思うんです。その違いが、理解され難いのです。

たとえば清水幾太郎の現代思想のテキストぐらいのレベルを、もうすこしこなして授業する。そういう具体的なものをイメージしながら、自分でテキストやカリキュラムをつくっていったいなと思っています。

また、四年間で自由に選択して、学生がそこにくればしめたもんですよね。こななくてもいい。自由選択制だから、学生がなくなったら自然消滅していく。そういう形にしておいたほうがおもしろいんじゃないか、と私は思っているんです。

▼エリート教育と大衆教育——旧制高校生と「市民」

橋爪 最初に、エリート教育のことですが、いまはやっぱりもう根本的に違っているわけです。たとえば一高は、入学定員が昭和の初期に三百五十人ぐらいのものですよね。ナンバースクール

全体で何人入ってきたのかわかりませんが、全人口との比率で言えば、どう計算しても一パーセント以下です。これぐらいだと、エリート教育が可能になると思う。一パーセントまでがいちおうの目安でしょう。

それからもう一つ重要な要素は、合宿、つまり学校に住み込むことを前提にしているわけです。一緒に住めば、共同体という意識ができてくる。それに、二十四時間常時接触しているわけですから、たとえば哲学系の人がいったり理系の人がいったりして、そういう人と全人格的に逃れられない形で接触するので、自分と他者について非常に深い理解が得られる。特にエリートにでもなろうという、ある志を持っている人たちが共同生活をする。そして、自分が専門としていない部分について、講義のうえからも日常の接触のうえからも、いろいろな有形無形の情報を受け取って、将来リーダーとしての資質に問題がないようにする。こういう目的を持っていたと思うんですね。旧制高校の三年間は、イニシエーションとしての役割も果たしていて、十分機能していたと思うんですね。あれはあまりいじくる必要はなかった。

でもいまは、そういう時代ではなくなって、三〇パーセント以上にものぼる人びとが大学教育を受ける時代なんです。これはもう大衆教育で、決してひと握りのエリートやリーダーの教育ではない。だから本当は、教育の目的から全部見直さなければいけなかったのに、そのへんの議論が曖昧なまま、スタッフとか学科の教える内容みたいなものを旧制高校の教育を規準として（ほかにあまりありませんでしたからね）、またアメリカのリベラルアーツの考え方やなにかを適当につ

ぎはぎして、戦後大慌てで教養部というものをつくったと思うんですが、本当に基礎的な議論が抜けていたと思うんです。

まず大衆化ということがあります。大学にくる動機がぜんぜん昔と違っていて、うんとレベルが下がっているわけですね。一パーセントの時代から三〇パーセントの時代になれば、第一志望でなくても、大学には行けと親に言われて仕方なしにくる、そんな人が主流になった。

寮もあるにはありましたが、どんな取り壊しましたよね。学生運動の影響もあるんですけど、原則として通学させているわけです。遠方からきている人でもばらばらにアパート暮らしするか、濃密な人間関係というのがぜんぜんないんです。サークルみたいなものを除けば。それが二番目の点ですね。

それから、大学のほうの対応が遅れているというのが、三番目の点。これらが積み重なって、教養はおもしろくない、つまらないといういまの状態が生み出された。

どういうふうに変えていけばいいかということですが、エリート教育ではなくて、市民教育だということ、まずはっきりすべきなんです。市民は、決してリーダーではないけれども、国民世論を形成し、国家意思に自分の一だけ、つまり自分のサイズの分だけ責任をもって、活動していく。このためにもやっぱり教養は必要です。もしぜんぜん世の中のことがわからなかったら、結局、まわり回って自分の生活まで破壊されてしまうかもしれない。

だから、少なくとも自分だけは自分の足で立とうというのが市民だと思いますから、リーダー

である必要はなくても、自分が自立するための教養教育というのはあるはずだ。いや、なければならぬ。それをカリキュラムの面から考えていかなければならぬ、と。

リーダーであれば、教養を得ることによる利得があるわけです。そもそも教養がなければリーダーがとまらない。で、リーダーになれば、さらに多くの利得が得られる。

だけど、市民のための教養というのは、まさに自分一人分ですから、楽しくなければ絶対学ばない。

リーダーであれば苦しくても勉強します。苦しいほうがむしろいい。ほかの人が学べないことを学ぶほうが差がつく。ゆえに、苦しいものを努力して勉強するという動機があります。しかし市民教育であれば、楽しくなければ学べない。まずこの点から違うわけですね。

それから難しくははいけない。簡単でとっつき易くないとだめ。このように、市民という概念を出しただけで、大学で教える内容も変わっていくと思うんです。

おとといまで中国に行っていたんです。中国の大学は、どういう感じかというと、人口比で、まだ入学率は二パーセントか三パーセント。重点大学に限って言えば一パーセント程度で、どんなに名前のない地方の大学も、ほぼ日本の東大に匹敵する競争比率なんです。しかも全寮制ですから、陸士海兵並みで、昔のエリート学校に相当するんですね。

五年ぐらい前、北京大学の寮にちょっと泊まったときに、目についたんですが、朝六時とか八時ぐらいからみんなそのへんを歩いているわけです、本を暗唱しながら。試験に備えて、教科書

を丸暗記しているわけです。試験の成績でもって就職先が決まるから、本気なんです。そういうふうにして勉強する。そんな学生は日本中探してもぜんぜんいないでしょうけど、中国にはそういう大学生がいくらでもいる。

ですからやっぱり人数の問題だと思うんです。進学率が三〇パーセントにもなった大学は、昔とぜんぜん違った理念を持たなければいけない。これがまず根本の問題だと思っています。

▼国家に対する個人のあり方を教える

驚田 ちょっとそのエリート教育ですが、日本には、基本的に、(橋爪さんもエリート学校を出ていますが)エリート大学はあるけれども、エリート教育はないんですね。先生方はエリート教育をやっているつもりでいるかもしれませんが。正規の教育とは別に、独力で、あるいは、自分で師を求めたりして、〇・何パーセントの学生が勝手にやっているんです。

どうも明治からエリート大学はあったけれども、それは教育の現場ではなく、合宿したり特殊な人間関係なりを通じてのものだったのです。逆にそういう日本の変形さが、ある意味で言うところの大衆教育のようなものをかなり養成してきたし、戦後もまがりなりにも教養教育みたいなものがあった、全体のレベル・アップに貢献したのです。

M工業大学に行ったら、はっきり教師が言うんですね。いや、私のところに文科系はいらないんだ。日本鋼管のオペレータになればいいんだ。エンジニアになればいいんだ。きちっとした技

術を教え、カリキュラムをきちっとこなすような仕方の養成は、いまの日本には少ないので、すぐ企業サイドから重宝がられているんだ。それでよろしいんだ、と。つまり、職人養成でいい、というわけです。

私は、それで別にわるいとは思わないけど、いまの技術革新などもふくめて社会の変化にもう対応していけないのではないだろうか。それともう一つ、市民という点で、これは橋爪さんが書いていますが、最低限、国家から自分を守るといえるか、国家に同化すると同時に、国家から自分を守るといえるか、国家との関係で自分がいたい何なのか、ということを経験知っていないと、ひどい目にあいますね。そのことをすこし学生にまとめて教えることが必要なのではないか。だから別に、社会学を教えるとか、哲学を教える必要はないんです。

教養科目のカリキュラムのいちばん真ん中には、現代人というか、現代日本の市民というのを、おき、まあ類型的だけど、人間と自然と社会において、接点をずっと攻めていって、一回モデル・カリキュラムを組んでみようかなと思っています。すこしおもしろくなるのではないかなと思っています。ただ学問として教養学という学問はないですが。

▼エリート教育と市民教育は、教育方法が異なる

橋爪 エリート教育と市民教育の二つがあるだろうということは、だいたいいま話が出ましたが、それぞれの内容がどういうものか、まだ話していないので、ちょっと私のイメージだけお話しする

と――

エリート教育は、本人の能力に合わせて教える教育ではないかと思うんです。決まったカリキュラムどおりに教えるというのはおそらく半分以上で、本人の才能に合わせて教えていく。本当は一人ひとり、才能は違いますから、一人ひとりに対応して教えていかざるをえなくなる。

たとえば数学が非常にできる人がいる。とくに集合論がよくできたとする。そこで、積分とか微分とか、集合論じゃないほうは、普通のカリキュラムで教えることにします。集合論とどうしても関係があるから、これは訓練しなければいけない。だけど集合論のほうは、同年代の人よりも抜群にできて、どんどんわかってっちゃう。そうしたら、じゃあ次はこれを読みなさい、その次はこれを読みなさい、と指示してやるべきだ。もう読む本がなくなったら、じゃあ今度はこういう論文を読みなさいと、そういう勉強の順番を教えてあげられる先生。これが、エリート教育ができる先生だと思います。あと討論ができるということ。要するに、特別の才能や適性がある人の先回りが必要ならならぬ。手作り教育ですから人数は限られる。こういうのが、エリート教育です。

これに対して市民教育というのは、トレーニングの比重がかなり大きい。だけど、市民もやっぱり自分で決断するのです。その合計が国家意思ですからね。そこでやっぱり私は、ケースメソッドが市民教育のなかでも重要だと思っています。ケースメソッドというのは、事例を通して学ぶこと、つまり体験学習みたいなものです。

ある市民講座みたいなところで、民主主義や民族問題の話をするついでに、憲法の話になった。その場で思いついて、ちょっと実例を出したんです。たとえば、日本国憲法に反対する過激な右翼がファシストみたいな連中がいる。国家の転覆を企てて決起を呼びかけるアジテーションを行ない、人間を集めたりなんかしている。さあ、どうするか。憲法を守るには、彼らに何か手を打たなければいけないのでは、と。

みんなどういうふうに反応したかというところ、警察に捕まえてもらおう、と言うんですね。そこで、武装しているかもしれない、ピストルじゃ太刀打ちできないと言ったら、じゃあ自衛隊に出動してもらえばいい、と言うわけです。けっこうちゃんとした大学で教育を受けたと思われる人たちが、です。

で、私は言ったんですが、まず警察官や自衛官は、それぞれ自分の職務を規定した法律に基づいて、合法的に行動しなくてはいけないのである。そこには、どこを見ても、右翼の思想家を捕まえていいとは書いてない。そんなことをすれば、戦前の治安維持法の時代に戻ってしまう。で、治安維持法と戦後の体制はこう違う、と説明しました。それから憲法には、思想・信条の自由、表現の自由というのがある。何を考えようと、たとえ憲法を破壊するというようなことを考えようと、それは思想の自由である。実行行為に移った段階で、違法行為があれば検挙するのが正しい、というようにことを説明しました。あと、その境界事例として、凶器準備集合罪のへんまで説明したんだけど、とにかく受講者からあまりすばっと正解が出てこないわけです。その種の意

思決定をするということを前提に、憲法を勉強してはいないんですね。

驚田 ケースメソッドとは別ですが、福田恆存と清水幾太郎との議論があった。清水さんは、国家破壊を表明している集団を一定限度拘束する必要がある、と言った。それに対して、どんな敵であっても国家意思で、国家の力で拘束してはいけないんだ。それがデモクラシーの原理だ、デモクラシーというのは、デモクラシーに反する人をも許容するのだというのが、福田さんの最終的な意見だったんです。

私はおそらく哲学とか思想なんか教えるいちばん核のところはそこにあって、そういうところをいろんな方法で教えていける。それは別に哲学であるか、社会学であるか、関係ないみたいですね。

最初に言った、個人としてというか、人間として国家にどう自分は対抗できるかというところまで、非常に単純なところまで考える意思みたいなことが、それが身につくかどうかかわからないけど、（右であるか左であるか関係なく）ものすごく重要ではないかなと思っています。

▼なぜ大学で「教養」教育をする必要があるのか

橋爪 自然科学と社会科学がちょっと違うところは、自然科学というのは客観的な法則性がまずあって、それを発見するという考え方なんです、どこまでいってもやっぱり。だけど社会科学の場合は、そういう意味での結論が対象世界にあらかじめあるわけではないんです。

たとえば民主主義と言っても、民主主義は客観的にあるわけじゃなくて、そういうやり方で人びとがふるまうことにしているというだけなんです。だから市民教育を通じて人びとがそれを理解して、自分たちの行動をそれに合わせて再生産していかなかったら、社会は民主主義にならないわけです。だから市民教育がもしなかったら、民主主義そのものもなくなってしまいかもしない。ここが違う。このことがわかるということが民主主義の根本です。民主主義というのはこれこれこういう知識だ、みたいに思ったら、それは自然科学や、高校か中学までの勉強と同じになってしまふ。大学に入って学ぶからには、そこがひと味違わなければならぬ。大学というのはやっぱり、一人前の大人になる、これから結婚して就職して社会を支える人間になるための場所です。責任と義務、すなわち自分が社会のなかでどういう決まりに従っているかということがわかる、それに最終的に開眼する場所です。そのために人文科学も社会科学も全部あって、それぞれ分かれてはいても結局、究極の目的は自分たちがどうやって社会をつくっているのか、この一点に凝縮されると私は思うんです。

驚田 ただ私はたくさん科目を並べる必要はないと思うんです。一つの科目をたくさん教師がアプローチしていけばいいんです。好きなように学生が選択すればいいわけです。最終目標をかなりターゲットを絞って、いろんな方法でやればいい。それはおそらくいろんな教師と議論したらできるのではないだろうか。

ところで、講義を九十分しゃべるのは大変なんです。準備がです。ところが、別な意味で言

うと、まったく簡単なんです。好きなことをしゃべっていいので。だから、現段階では、学生にどう教えるかという前に、カリキュラムづくりみたいなものをかなりマトを絞ってやらなと失敗するのではないか。すぐ学生に、こんなことやって、どうだ、おもしろいか、ということからは始まらないみたいですね。

ただこの教育がおもしろいのは、ヘーゲルも言ったように、教養というのはデモクラシーと啓蒙なんです。デモクラシーは別にいま私たちが考えている自由主義である必要はないんです。何でもいいんですね。要するにみんなで決めればいいわけですから。でもそれが成熟していくというのは、啓蒙を通るといえるか、教育を通じていくんです。だから、義務教育からずっと学んで、その集大成というか、そのまとめみたいなのが大学なわけです。

いまの教科書をかなり丹念に探してみたら、すごい難しくなっているのがわかる。内容自身は、非常にいいことを教えているんですよ。ただし、教科書の文章がぜんぜん読めないんですね。もうびっくりしましたよ。私たちもあれを読んでいたのかと思いました。教科書というのは、ある種の教養の項目集みたいなもので、この点ちよつと……。

橋爪 その教科書は、どこの教科書ですか。

驚田 高校の教科書です。倫理とか政経とかですね。そういうのをもうすこし知識の量も単純化しながら、しかし段階を踏んで覚えられるような形にしていけば、すごくおもしろい教育になるのではないか。

▼若者の教養のテキストⅡ『別冊宝島』

驚田 もっとも教養のテキストはぜんぜんないんですね。なかったんですね。私は国民の教養のテキストとして『別冊宝島』をあげました。橋爪さんはあれに書いてますね。

橋爪 たまたまちょっと書いていただけで、べつに宝島社のまわし者じゃないのですが、あれは本と雑誌の中間ですよ。ムックです。もともとは『宝島』という雑誌があって、本誌のほうは私はあまり見たことがありませんが、その別冊という形で書店に常置しているわけですね、バックナンバーを。はじめはなんか『ボディの本』とか、けっこうコミュニケーション運動的なものから始まったように思いますけど、あのあとだんだん八〇年代の一つのスタイルをつくった。あれを見ると、ああいう活字を買う大学生といえますか、サラリーマンというか、そのライフスタイルが浮かんてくるような、なにか新しいものをつくったという感じがします。最近の学生さんは、まず机を下宿に持っていない。本棚もない。フローリングの床かなんかにソファベッドみたいなのがあって、ステレオなどはあるんですけど、ほかのものがありませんね。文化とは、だから音である。そういうところには『別冊宝島』ぐらいまでなんです、置ける活字が。

驚田 本当に小学六年生ぐらいまで普通の子でも、中学生から高校になったら、全部、ステレオを買え、と言いますからね。私のところも三人子どもがいますが、一人にむりやり買わされたら全部買え、って。音というのは共有できないんですよ。持っているテープもみんな違うんですよ。

兄貴が聞くやつは私は聞かない、と。男の子のほうは、サッカーとポップスです。大学に入ったから、今度はギターですね。本を読まないのかというと、数は少ないが、本は押し入れに隠しているんですね。で、自分の好きな作家とか装丁のいい作家、たとえば中野美代子なんて、とんでもなく難しいんですけど、そういうのを読んでいるんです。読んで相当理解するんです。別に何も難しいものとかやさしいものではないんです。自分の好きなもの、これは自分の糧になるなと思うと読む。

いまの学生ですけど、私は偏差値五〇ぐらいの学生に本を読ませるんですけど、自分の好きなものはどんな難しいのでも読みます。すごいスピードで読んでできます。これは圧倒的な力ですね。だから本を読まないのではなくて、読む必要がないと思っているわけですよ。でも必要になったら調べてきて読むんですよ。

たとえば私なんかの場合は、本を読まないで恥ずかしいからという感じでしたね。文学部ですから、本を並べてないと。経済とか法とか、ああいうバカな人間になりたくないと思って。だから本を自分の部屋に、ともかく古本屋から本を買ってきて入れておくという、そういう強迫観念がありました。いまは必要だから読むということです。

だから教養が必要だということが、いまの子にわからなければ、教養を教えるなんて言っちゃって、失敗します。いくらわれわれが何を言っても。だから『別冊宝島』というのは、必要な項目を読めばいいので、全部読む必要はないわけです。この人好きだから、と。私も同じように読ん

でいるんですよ。

また著者では売っていないんですね。橋爪さんが書いても、橋爪さんが書いたぞ、買え、だれだれが書いたから読めって、そういうのではないんですね。匿名性なのですね。おそらく匿名性とか共通性とかというのが、市民教育、普通の人間たちが共通に持っているとか、あるいはだれでもが近づけるといえるか、そういう知識とか技術の内容だと思っんです。

私、いまちょうど『若者論』を書いたばかりなのです。若者の長所だけを書いたんですけどね。ところがいままでの教育はおそらくマイナス教育というんですか、こういうふうにするな、とばかり言っている。

私が出た大学の文学部は学生数が少なかったから、学生一人に、教授、助教授、助手がずっとついていたんです。で、おまえはできない、おまえはできない、とやるのです。一人ですからね、こっちは。それを八年間ぐらいやらされるわけです。できない、ということしか言わないわけです。そういう教育で耐えていたのが何であったのかよくわからないんですけど。そういう教育は、やっぱり大衆教育というか、数の多い教育ではもうだめですよ。おまえらはバカだ」というふうなですね。「そういうおまえがバカだ」というふうに心で思ってみんな去っていきます。エリート教育というのは変ですけど、鍛えられるということを自分で期待している人にはいいかもしれません。

だからいまはやっぱり長所を発見して、成長を手助けするということか、ある意味で言うと、道案

内をつくってやるというか、そういうことになると思う。これは学生だけでなく、あらゆる側面に通じていくのではないだろうか。いまの若い人がすごいのは、自分の長所を際立たせるという術が実にうまいんです。実にうまいというか、だれでも自分を美しくみせる術がすごくうまくなった。化粧だけじゃなくてですね。だから大学にきても自分の好きなことをやることにっいてはなんの負担も感じないでやるんですね。いやなことは全部拒否しますね。おもしろいなと思っますけどね。

橋爪さんが前に小さい雑誌ですが、自分の学生と議論をしているのがありましたね。

橋爪 大学生協連合会で出してる『いずみ』です。

驚田 あれはおもしろかった。自分の学生と、なぜ学問してきたのか、ということを議論しているんですけど。そういうことにあまりいまの学生は興味を持たないんですよ。先生が何者であるかなんていうことに、あんまり関心を持っていないんじゃないかな。それよりも授業に出てきたのだから、ちゃんとやることを教えてほしいと。だから、橋爪さんの大学は風通しがいいな、と思っました。

▼「講義」は、二、三回でいい？

橋爪 教養教育も教育の一種ですよ。教育というのは、時間を有効に使っって要領よく、教えるべき内容を伝えるためのものだから、やっぱり本が重要な要素になる。で、本ということになる

と、昔は本でさえあれば義務感をもって読んだ。そういうカルチャーだった。でももう、そういうカルチャーは消滅した。つまらなければ読まなくなった。自由に教育を受け、自分の生活にフィットする範囲内で受け入れるという、典型的には『別冊宝島』みたいなものが、一つの象徴的な主流になった。

そうすると、それに対抗して、それに打ち勝つようなプログラムを考えなければ、教養は成り立たない。もうそのとおりなんです。そのための手段としてはいろいろあるかもしれませんが。まず講義という形式がもう相当に時代遅れだ。先ほども、読み上げてノートに写させるという講義のやり方の話がありましたが、あれはドイツの古い学校の、ヘーゲルの時代の伝統からきたわけです。あれは、本の複製なんですね、ノートというのはね。だけどいまはコピーもあるし、そんなことはなんの意味もないわけで、本は買えばいいわけです。一人が買って、コピーをすればよくて、本もいらなくなった。読み上げていけば当然時間がかかるから、十五回とか三十回の講義なんだけど、コピーして渡せばいいわけです。これはもう二、三回でいいわけです。残りの時間に何をしたらいいのか。楽しいことを何かするなり、いろいろ考えていかなければならぬわけですが、そういう基本的なところからの議論がぜんぜんないんですね。それで時代にとり残されているというのが大学の現状だ。

▼教養教育の中身——人生の課題解決のプログラム

驚田 おそらく教養教育なんて偉そうに言っていますが、どれくらい知識があったらいいのか、技術があったらいいのか。収縮したら、なんにもなくて教育なんかする必要はないと言われるかもしれない。専門あるいは技術の体系があつて、それをきちつと（いまさっき言ったけど、M工業大学なんかではエンジニアにするために）やらないといけないわけですね。

でも、たとえば教養だったら、哲学なんて、そういう思考を教えるというのは、本当にいろんなふうにして教えたらいくらでも長くなるけど、核を書いたら、何も無いのかもしれない。（笑）ヘーゲルは哲学書をあれだけたくさん書いたけど、結論は非常に簡単なことで、おれは偉いんだと。おれの真似をしたら世界はよくなるんだ、ということになるかもしれない。そういうふうな危機感はあるんです。

橋爪 いろいろな考え方がありますが、やっぱりエリートと市民の教養教育はぜんぜん違うと思うんです。エリートだったら、たくさん知っていれば知っているほどいい。それが教育の原則なんですね。だけど市民の場合は、内容を精選すればするほど、優れた教育になる。しかもそれが人びとに喜んで受け入れられる共通部分であるべきで、やがてそれが社会の共通項になっていくだろう。しかもそれは、国際的なものでなければならぬ。だから、これからその内容をつくらなければいけないのではないかと思います。

私が思うのは、平均的な大学卒業生、西暦二〇〇〇年代の一生というのを考えてみて、その人の人生に見合った課題解決プログラムとして教養教育を考えるとというのはどうだろうか。たとえば結婚して子どもをもうけたり、家庭生活の男女の分業とかフェミニズムからはじまって、親子はなんだとか。それから親もだんだん年をとってくるとどういう問題があるか。家を買おうと土地問題はどうなるのか。マネービルで何をするとか。就職するとしたら、独立したほうがいいのか、大企業がいいのか、公務員がいいのか。選挙もあるだろう。どうやって投票する。株は買った方がいいのか。

こういうふうな課題に対して、それぞれの学問がそれに解決を与えていく。たとえば経済学ではこういうふうな考え、これが結論だと。知っているのと知らないではこれだけ違いがあると。政治学ではこういうことを言っている。民主主義にはこういうパドックスがある。これを知っているとすこし違う。そういうことをいろいろな学問でもって教えていくという、そんなやり方があってもいいんじゃないかと思えますね。

驚田 そうね。だから人間の生き方のモデルケースなどというのは、すごくおもしろい。そういうことを私も考えているんですけど。でも、難しいのは教師が教えられるかということなんですね。

▼経験のエッセンスを伝える

橋爪 実際に社会に出れば、場当たりのであれ、オン・ザ・ジョブ・トレーニング、つまり実際に体得していかなければならないわけですよ。でも、それだけでいいのだったら教育なんかいらんんですよ。ぜんぜんいらん。それを、予防注射じゃないけども、事前に書物を通じて、上の世代の知識を要約して伝える。そのおかげで、あとの世代がよりよく自分の人生を送れる。これが、教育のエッセンスでしょう。上の世代の知恵としていちばん大事な点を、下の世代に伝えるということは、いままでもやってきたのだから、いまでもできるはずだし、やらなくてはいけない。問題はその内容を改めて精選すべきだということなんです。いまは余計なことばかり教えている。そして試験ばかり。そんなことに非常なエネルギーと時間を使って、結局、教育の目的が達成されていないというひどい状態なんです。

驚田 私は上の世代というか、自分たちがどれくらいのエッセンスを自分たちの下の子に教えられるかというのがいちばん大きいと思うね。大学でもそうだと思うんです。もちろん義務教育もそうだと思う。そのことをおそく若い子も納得するわけです。ただ、私たちはエッセンスで教えてないから、いったい何を教えてくれるの、と言われてるのです。

世代論で、相互理解などできないんじゃないのというふうな切り方をされますね。いまの若い子は知識はなくて、などと言います。しかし、教えるというか、伝達する方法をこちらが持って

いないで、無知だなどと言ったって、ほとんど無意味だと思うんですね。

ちょうど共通一次試験という非常に歪曲された形だけでも、だれでも偏差値五〇ぐらいの子なら五十―六十点とれる問題で高校で訓練する知識と技術の量のストックみたいなことを、ずっと十何年間やってきたので、いまの子のほうがトレーニングは積んでいるんですね。ちょっとこう言くと、そんなことない、ってみんな言いますけどね。若い人と付き合ってみると、そんなことないのです。

だから目的はぜんぜんつまらないことにあったのかもしれないけども、そういうちょっとしたシステムをつくって――受験というのは要するに知識をどれだけ蓄えてそれを共有して伝えていくのかということの最終仕上げですからね――も、いい結果というか（もちろん弊害もありますけどね）出ている。

私は全共闘世代までの世代と、それ以降の世代とはずいぶん違うと思いますね。

▼共通一次は、資格試験に

橋爪 違うということは同感しますが、私がちょっと心配なのは、共通一次試験がもし高校で習得しておくべき共通要素を試験しているのだとしたならば、それは卒業試験か大学受験資格試験として課すべきだ。何点以上とればまったく同じ、そういう試験にすべきです。いまは入学試験（競争試験のデータ）として使っているわけですよ。

驚田 そこが間違っている。

橋爪 そこを間違えている。共通の基礎知識をためす試験は資格試験でやるべきで、もしそれを競争試験としたならば、大変なことだ。たいていの人間はエラーがありますから、八十点ぐらいです、どんなに頑張ってもね。それを、八十点よりも八十三点のほうがいいとか、八十五点だったらこの大学に入れるというようなことをやったら、コマネズミのようにわずかなエラーをなくすただけに大変なエネルギーを使って何年かすごさなければならぬ。これはとんでもない弊害です。

そうじゃなくて、資格試験で卒業させて、あとは別な原理で入学者を選抜しなければならない。驚田 まったくそのとおり。だから試験だけは、マイナス点でやっていく方式に全部なっているんですね。大学もそうです。だから実際の教育のなかではいろんな試行錯誤を許されるけども（授業のなかでは）、試験だけは絶対許さないという、ああいう不文律みたいのができあがる。

橋爪 自動車の運転免許みたいなものは、三十点の人に運転してもらっては困るから、七十点以上というのは合理的だと思うんですよ。だけど、大学の学部進学というのは要するに適性があるかどうか、何ができるかということが問題なんだから、何ができなかったかなんていうことはどうでもいいんですよ。だからそこで発想転換することがまず第一歩だと思いますね。

そのうえで、大学に何か共通なものがあるというのならば、それは教養教育として、各大学が相談してやればいいんだと思うんです。

驚田 そうなると試験にものすごく精力を注ぎ込まなくてはいけない。いまは一律だから別にべたで全部やれますけどね。一つひとつの学校が一人ひとりの学生を採るときに、その適性は何であるかということを半年ぐらいにわたって面接したり接触したりしなくてはならない。これは大変な労力なんですね。だから大学の教師はそれはいやなんです。(笑)

▼学生が大学を「選抜」できるには

橋爪 私の考えは、大学がそういうエネルギーを使う必要はない。自分がどの大学に向いているかということは、受験生が自分で判断すればいい。

驚田 本当はそれができなくてはいけませんね。まったくそう思う。

橋爪 たとえば病院と、似ていると思うんですよ。お腹が痛い人は、眼科や外科には行かない、必ず内科に行くでしょう。それぐらいの判断力は患者にある。病院というのは、そういう意味で言うと、まったく自由なんです、なるべく地元に行ったり高いところはやめたりするから、混雑現象もおきなくて平均しているわけです。そしてこの制度に、治療する側も患者もまあまあ満足している。大学だって同じだと思えます。成績表はカルテである。

驚田 いまそうやってやろうと思ったら、いい大学が定員割れをしないように、いい大学にたくさん行けるようにしなければならぬ。いまは定員制があるから本当につまんない学校のほうが儲かっているんですよ。儲かっていると言うと変ですけど、経営がいいんですよ。国立を私はほと

んど不経済で、私立はいいなんて言っているけど、実情はそんなに単純じゃない。私立は経営を合理化して、ある意味で言うところの学生をほとんど貧困状態においてやっているから「いい」と言えるのです。ですから、やっぱり学校のなかで競争して、ここの病院は治るよというふうなメニューができたなら、学生も自然に選ぶと思うんですけど。いまの状態ではちょっと選べないような気がする。

それと、いまの学生はどこを出たというのはあまり気にしないですね。会社とか企業はまだ採用時に気にしていますが、でも変わりつつあります。そうしないとうまくいかなくなっています。これだけ大学生が多くなると、そんなにエリートを採れませんよ。東大なんていうのを採ったところで、一人採ったからって力になるかというと、何もありませんよ。社会全体がそういうスタイルを許さないようになっていく。

それから学生は、私たちのときは一次志望校に入らないといやだと思ったけど、一次志望に入れなくて、二次志望、三次志望になっても、行ったところがいいんだ、というようになっていく。あまり大学に期待していないという現れでもあるんですが。

▼私立大学教養教育カリキュラム開発センター

橋爪 ところで、生活に即した教養のカリキュラムづくりには、手間ひまがかかると思っています。いろいろな分野の先生が相談しなくてはいけない。だけど、個々の大学ごとにまったく独立に同

じことをやらなければいけないということはないわけなんだから、たとえば私立大学は全部協力して私立大学教育カリキュラム開発センターみたいなものをつくって、そこでそういうエキスパートのみなさんなんかモデル的なものをつくる。

いまは私もしょっちゅう使っているのですが、液晶プロジェクターみたいなものがありまして、ビデオをかければ画面いっぱいになって映画みたいなんです。こういういろいろ便利なものもありますから、基礎的な部分はカリキュラムをビデオ教材にして、あとはディスカッションをする。そのときの司会役——議論が変なほうにいった場合に、交通整理するとかいうのは教室でないとできないから、それは大学の先生がやる。こんな方法もありうるのではないでしょうか。

驚田 むしろいまの子は自分でビデオを持って、見ているほうがよく覚えるんじゃないかな。

橋爪 私の場合はなるべく楽をしたいので(笑)講義もビデオ化したのですけども。

私の授業をビデオに収めるだけならば、単に私が楽するだけで、学生さんにはほとんどメリットがない。そこでひとつの方法として、資料映像みたいなものを編集して、九十分のうち三十分とか四十分見せる。そのあとそれについて質問させる。そういうほうがインパクトがあるのではないか。来年ちょっと取り入れようと思っています。

驚田 私の授業は出席しなくてもいい。書いたものでいちばんやさしいやつを読んでもらったらわかるから。しかし授業に出たら出ただけのメリットはあるから、たまに出ておいでというぐらい。いまのところは、こっち側に具体的な教養教育のカリキュラムがないからね。

いまさっき言った、人は課題を解決していく能力をどうつけるかというのは、そんなに難しいことではないんです。ただ、その答案を自分一人で書いたら奇異になるんですよ。日本では教養教育を研究する機関も、それからその研究するための教師のスタッフもないんです。まあ諸外国もないのかもしれませんが。このところはすこし気をつけてやらないと失敗するのではないか。あんまり一律はよくないけれども、最低限のここだけはきちっと教養教育のなかに入れているかなければならない部分があるはずなんですよね。

私の総合的なカリキュラム案は、人間・社会・自然という三分野からなっています。それはいまあるやつを——あんまり激しいやつを言うと、みんな逃げていきますからね——やっていきながら……。もうそれは、実際に私たちの教養教育のなかではやっているんです。

ただし具体的なものを、こっち側が実践してみないと、だれも納得してくれないですね。そうするものすごくしんどいんですよ。自分で自分の首をくくっているのではないかと思う。学生はたくさんきますしね。なんかおもしろいことをやっているのではないかと。試験の答案はこんなになりますね。

▼教養教育を教えた教師はいなかった

驚田 いや、専門と教養の対立の根は、あんがい教養教育がなかったことにあるのかもしれないのです。戦前はエリート教育で教養教育というものをやった。その制度が、新制大学に残った。

しかし、大衆教育にふさわしい内容がなかったものだから、担当した先生に逃げられたんですよ。私の経験したかぎりでは、偉い先生というか、熟練した先生が最初教養を受け持ったのですが、ぜんぜんできなかったですね。新制大学の学生ですから。しかも、はじめは、戦争から帰ってきたばかりですからね。だから昔のように寮に入っていて、みんな名前知っていて、気心知っている学生じゃないので、何を教えていいかもわからない。ゲーテは何か、と言っても、ゲーテなんかなんだ、と。そこで、すぐ若い先生が教養の専属になって、で、哲学なら哲学を教えるんですよ。好きなように。ハイデッガー専門ならハイデッガーらしいことをいろいろやるんです。でも、学生は（私たちの場合）講義三回目で一人もいなくなりました。百五十人ぐらいとっていです。そういうのはいまの学生はわりとがまんして聞いてくれますけど。

だから教養教育というカリキュラム、それから内容もなかったというのが実情です。ある意味で言うと、いろいろ実験して、大学で別にそんなものを教えなくてもいいというふうになるのかもしれない。別な機関で別な形で教えたほうがいい。もちろん高校までにそういうものを行ったほうがいいんだというようになるのかもしれないですよ。むしろそういうふうに思ったほうがいいのかもしれない。そうなれば、私は高校で教えてみたいなと思っています。高校と予備校にはすごく興味があるな。

教養教育は、段階を踏んでずっとゆっくりやるのがいい。知識の量ではなくて成熟ですからね。たとえば、日本国憲法で書かれているのは、個人が国家から身を守るために最低限の線をひいて

いるのだ、ということをお口で言うのではなくて、小さいころから、一つの歴史的な事例とかあるいは個々の簡単な内容、親子の関係などからずっと教えていく。これはすごく力になりますね。社会科も教えて理科も教えてという形で教えるのではなくて、そのような先生が必要になるかもしれない。そうなる教育はおもしろくなるかもしれない。

▼大学院でも教養教育が必要だ

橋爪 きょうは、大学を卒業して社会に出るということを前提にして、大学でどう教養教育をするかという話だったのですが、東工大の場合など、七割ぐらいの人が大学院に進んでしまうんですね。たいていは修士までですけど。学部の間では完結してなくて、その専門で身を立てる人たちは、やっぱりその先もやらないといけない時代になってきている。昔に比べて学問的な完成が、二年か五年ぐらい遅くなっているんですね。

で、そういう点から考えると、学部で教養教育というのがあっていいでしょうけども、じゃあ大学院とかその先はどうしたらいいのかという話もまだあって、東工大で支持を集めつつある考え方は、副専攻や他専攻をもっとずっと重視していくべきだろうという考え方なんです。

いまのままですと、専門になればなるほど、どんどん視野狭窄になっていき、最後はタコ壺になって、自分の研究室のことしかわからなくなっておしまいということになるわけですね。これは本人にとっても不幸だし、学問的生産性にとっても非常にマイナスである。一つの方法、一つ

の視野しなければ、たちまち行き詰まってしまふ。そのときにヒントになることは、必ずほかの場所にある。そういう情報を適切にどれだけ持ってこれるかという能力が、次の時代の学問を開いていくためにどうしても必要だろう。

それは他専攻ないし副専攻ということですが、ある道の専門でありながら、ほかの専門についても学べる能力、ほかの専門についても情報を手に入れる能力をトレーニングする。これは、学部より一步進んだ段階で専門人として身を立ってゆく人たちの必須の能力になるだろう。

たとえば生命科学なんかをずっとやっていくとしますでしょ。するとそれが、数学のある分野や、物理学や、哲学なんかと突然関係を持ってきたり、ということがあるわけなんです。他専攻は、学部の教養教育の次の段階に位置づけられた、非常に密度の高い知識のあり方なんじゃないか。

▼専門が生産的であるためには

驚田 そのことはいろんなところで経験しますね。哲学は雑学（社会学も同じだと思いますが）だからということ自身が問題になってますよね。ほかの人と議論したりする場合に、議論できる人はだいたい自分の専攻で迷った人とか、自分自身でいろんなところに行った人ですね。そういう人はわりと三十代か四十代の先生に多い。

もうすこし言うと、どんどん専門化していったって、専門そのものというようなところに到達した

ときには、もうその専門がある意味ではほとんど乗り越えられているんですね。乗り越えられるというか、通用しなくなっているというか、その現場ではですね。そういうところから出てきて教師になるから、ますます狭くなって、ほかはできなくなるということがあります。そういう人はやっぱり大学の教師にならないで、専門家になるならいいけど、大学の教師になるとちょっと困るんですね。

だから本当にトータルな専門家を育てるのだったら、専門の純化はやめたほうが……。やめたほうがいいというか、そういうシステムをすこし多様化しないと、システムだけができあがって、あまりいい内容が出てこないのではないか。それから能力がある人が大学院に行かないのではないかと思いますね。

あまり大きな声で言えないけど、タコ壺になる人は、専門でもそんなにいい仕事をしている人はあんまりいないんですけど。どうですか。

橋爪 あんまりよく知りません。印象としてはそうですね。

驚田 私もあんまり知らないけど、社会学でも、ごく狭いところでやっている人は、別にどうでもいいというか、まあ好きにやってくださいというふうなことになっていくのではないか。

たとえば田中美知太郎さんなんか、プラトン以外は読まない。プラトンでいいんだという言い方をしている。プラトンで全部世界を読む。しかしプラトンで世界を全部読めるんだというから彼はすごいのです（もちろん読めないところはたくさんあって、齟齬はたくさん出るんですけど）。そう

いう専門ならいいんですけど、プラトンは知っている、ほかは関係ない、こういうふうになりがちというか、なってしまうんですね。

だから専門の人が本当に専門人として生きるといったら、自分の専門で世界を全部読み切るというか、あるいは機械論なら機械論で世界をつくりあげてみるという、そういう作業をしている人はすごくおもしろいし、いい仕事もする。

橋爪 私もまったく賛成ですね。結局、専門化といい、専門が細分化されていくといっても、こういう現象だと困るんですよ。人数が多くなって、昔、百人で研究していたことを千人で研究するようになり、それがまた三千人に増えていく。するとやっぱり、一人ひとりの差異化をはからないといけない。とにかく、ほかの人がやらないことをやる、おれだけが知っているんだぞ、と。これが防衛本能になるんですね。そうすると学問のサイズがどんどん小さくなっていった、しかもそれはほかの学者も知らない。まして一般の人はぜんぜん知らない。だけど私だけが知っているから私の存在理由がある。こうなっていくのはまったく消耗なことなんです。

だからそれを乗り越え、自分の学問の生産性を保証しようと思ったら、そういう防衛姿勢じゃなくて、自分の学問を開いて、ほかの領域と自由に交流していくなかで新しい発想を付け加えていくという、そういう姿勢が必要だ。それがなかったら、何人学者がしようと、その学問はあっというまに停滞してしまっただめになるんですよ。

▼きらいなところへ向かう心性

鷺田 これは性格かどうかわからないけど、自分がいやなところというか、自分はそっちへは行きたくないというところというか、自分が進みたいところの反対のところをちゃんとやっていないと、こわいな。自分のいやなところにとらわれて自分がだめになったらそれでいいという、そういうふうになってきた。結果としては自分のいやだと思ったところがだんだん好きになってくるんですね。これがちょっとこわい。こわいというか、そういうふうになるんでしょうね。おそらく。

たとえば哲学をどんなやっていったら、哲学がだんだんおもしろくなっていくというか、ほかの社会学が好きになって、そしてそれは哲学が好きになるためにやっていたんだけど。要するに社会学と違う部分を好きになるためにですね。ところが社会学にとらわれていくというかね。マルクス主義をやっていて、じゃあ研究もやらなくてはいいけないと研究をやったら、研究のほうがおもしろくなった。そういうことが、大きいスパンとか小さいサイクルはいろいろあるかもしれないけど、いつも襲ってきますね。

そしてそういうところに行って、自分に「固有」と思っていたものがなくなったら、まあ大したことなかったんだから、いいんだと。私も教養教育なんて言うけども、そんなもの一生懸命やったけど、まあ、なかったね、という、そうなくてもそれはそれでいいと思うんですけどね。

ただ、いまの社会にとって教養教育はすごく必要だし、人はそれを欲しているということは確かだと思うんですね。

▼大学は「揺れて」いない

驚田 ちょっと困るのは、大学がぜんぜん揺れてないことです。混乱しているだけなのです。権力闘争をやるところは揺れてますけどね。揺れてないというか、文部省は自分のテリトリーを守るために自由化を言っているわけで、決して学問を発展させるために言っていないわけです。ただしそれを利用して自分のところにたくさん予算をよこせという運動で、大学が活気づいている。大学はすごく楽でつぶれないんですね。そういうシステムになっているんです。でもそれはもしかすると（書きましたけど）大学は無用になってしまいう前兆なのかもしれない。社会主義みたいだね。だからその点はおもしろいな。私はいつ無用になっても、なくなってもいいと思っていますけどね。

▼大学は、どこの国にもある、国際機関だ

橋爪 一つの考え方からすると、大学というのは、どこの国にもある国際的な機関の一つなんです。インターナショナルなんです。こういう機関って、よく考えてみると非常に少ない。たとえば小学校だったら、その国の民族教育みたいな部分があるわけでしょう。だから共通化できな

いですけど、大学というのは留学もできるし、先生の交換もできるし、原則として国際的に共通の知的ネットワークができますね。

だけど日本の場合、後進国の例にもあるような、日本の国の都合のいいように適当な大学をつくって、勝手に大学という看板を掲げてきたんですよ。それがいかにも時代遅れになっている。留学生も増えてきた。ついてはもうちょっと本来の大学にしようじゃないかという、まともな動機もあって、いまいろいろな要求が大学に沸き起こっている。多くは非常に正当なことだから、ぜひそういうふうに直していくべきだと思います。

驚田 それと大学も、かつては向こうのエリートがきたけども、いま動機はいろいろだけど、日本に働きにきながら、その目的のために大学にきているという、大学を出てない子とか、あるいは大学を出ても落ちこぼれみたいな人がくるわけですよ。日本の大学を出たいと。こういうのを私立でどんどん拾っていくと、国際交流をやっていく場になるんですね。

ところが授業料がとても高いのね。私立なんか徴収するんですよ。大学の収入としてはたいした額ではないのに。やめたらいいと思うんです。あるいは本当に安くするとかね。もちろんその人の事情もあるけども。そういうふうな形で、私は私立のほうがどんどん受け入れ（とくにアジアの人を）ていける資質はあるんじゃないかと思えますね。

そうすると市民教育になるから、逆に言うと、今度は国際交流という旗印でなくて、本当に国民個人同士でわかりあえる。知識も、それから技術も人間の生き方も交換できる。そんな中国か

ただ閉鎖的なね。学者は、だから難しい。それは中国も大変だと思うけどね。ああいうエリートになるとね。監視されているわけでしょう。

橋爪 私の知り合いの方でも、某一流国立大学の法学部大学院から別の某国立大学の助教授になった方がいる。その方も学生運動のリーダーでものすごく優秀な方なんです。

驚田 だからそういう人は日本では就職の口はあるけども、もうすこし広く、高校を出て日本で学びたいという人がくるとおもしろい。もうそうなのもいいんじゃないですか。

らくる学生が二、三人よってくると、こっちもすこし変わるわけですね。

橋爪 明治時代に日本が国家予算の四分の一ですか、三分の一ですか、それぐらいを使って教育立国を志した。そういうことをいまの第三世界もするべきなんです。でも、それだけの基盤や予算がない。そうしたら日本が教育の面でサポートするという、これも立派なODAの一つです。だから国民も、そこをよく考えて、奨学金を出すなり、適切な方法で留学生をもっと受け入れる努力をする。そういう機関として大学をつくり直す。これは日本が、国際的に認知され、お互いに助けあうよいネットワークをつくっていくための将来の投資にもなるわけだから、非常にいいことだと私は思います。

驚田 いいことだけではなくて、そういうことをやっていないと、なんかうまく個人個人が接触できないでしょうね。ただ、中国の場合は、すごいエリートもくるんですよ。やっぱり東大とかなんかに入る子は、国費でくるんですよ。会社というか、公社みたいなお金でくる人もいますね。

橋爪 いろんなケースがありますけど、国費のほうが優秀なのかと書いていろいろ聞いてみたら、国費の場合は党の幹部であり勉強ができない人もけっこうまじっていて、私費のなかにかえていちばん優秀な人がいるケースも多いんです。

驚田 私たちの大学で、「永井荷風論」を書いて今度サントリー学芸賞をもらった劉岸偉さんを助教授で採ったんです。就職がなければ帰らなくてはいいけない。ドクターをとってしまったら。